纐纈厚さん講演

天皇制と戦争　沖縄・朝鮮

これからの日本

山本みはぎ

8月10日、代替わりを機に天皇制を考えるあいちネットワーク（不戦ネットも参加）の主催で、明治大学特任教授の纐纈厚さんを講師に、表題の講演会が行われた。8月は15日を中心に戦争にまつわる催しやマスコミでの特集がある中で、天皇制を主題に沖縄や朝鮮半島の関係で問い直そうという試みで開催された。
纐纈さんの講演の要約と、講演を聞いて昨今の動きに対しての雑感を記します。

纐纈さんは、まず昨今「右傾化」という言葉で言い表されるが、そもそも戦後国家は「聖断」によって戦前の帝国が形を変えて移り変わった。戦後も象徴というように名前は変わったけれど元首天皇制という形で現代化している。自民党の憲法草案の中に「元首天皇」が含まれていたのは記憶に新しい。そのことは、大日本帝国憲法下に回帰したい、というものだ。そのことは、国民を市民としてではなく臣民としてみる。また、従軍慰安婦や徴用工問題の清算をすることを拒否していることは、大日本帝国意識そのものだ。安倍首相の戦後レジュームからの脱却とは、戦前政治への回帰であり、そのことを組織として支えているのが日本会議だ。

明治国家成立とともに、日本は間髪を入れず、台湾に侵略し、朝鮮半島では江華島事件を契機に、日清・日露戦争とアジアへの権益・領土確保を進めていった。明治維新後の日本国家は、天皇を核とした帝国としてあった。天皇制を維持・強化していくためには軍事力と経済力が重要で、そのために日本は戦争をやり続けなければならなかった。まさに「天皇による、天皇のための戦争」であった。

ポツダム宣言を拒絶したのは陸軍だった、と言われているが違う。1945年2月近衛文麿が天皇に「矛を収めたらどうか」と進言したが、天皇は「もう一泡吹かせてから」と拒絶した。戦争を終わらせるという権限も権能も持っていたのに国体護持のために沖縄を捨て石にし、東京大空襲やソ連の「満州」侵攻も、ヒロシマ・長崎を引き起こした。植民地支配、侵略戦争は天皇のための資源のために行われた。日本の植民地支配の基底には天皇、天皇制の問題性があった。

戦後の天皇制のもとでは軍事力は完全にそがれた。しかし、朝鮮戦争で連合国のアメリカの駐留がない状態の時に、引き続き駐留するか、さもなくば再軍備をとアメリカに懇願したのは天皇だった。そうしてできたのが警察予備隊だ。

そういった過程の上で、纐纈さんは歴史の分析や再検証だけではなく、私たちが今後どうしたらいいのかという提言もいくつかされた。まず、①そもそも天皇制自体を問うこと。すなわち、天皇制は差別の構造を常態化するものであり、民主主義を溶解するものとしてあること。②歴史としての天皇制と政治としての天皇制と文化の中に根付いている天皇信仰を問うこと。③「過去の戦争には責任がなくても明日の戦争には責任がある」つまり、侵略戦争や植民地支配の事実を記憶し継承することが必要。④護憲運動の再定義を。言うまでもなく、1条から8条が天皇条項になっていること。⑤市民主体の政体構築。すなわち、安倍政権の言う戦後レジュームからの脱却の回避を行うこと。⑥近代日本の歴史をアジア、世界を射程にとらえる視点を保持すること。⑦アジア平和共同体構築を目指し民際交流を進めること。

纐纈さんの講演の後、初代宮内庁長官の田島道治が昭和天皇とのやり取りを記録した「拝謁記」がマスコミを通じて話題になっている。マスコミの多くは、昭和天皇が敗戦後退位を考えていたとか、講和条約締結時のお言葉に「反省」の意思を入れることを当時の吉田茂首相に削除されたなどと、平和主義者のように装っているが、この「拝謁記」には改憲による再軍備をしようとする次のようなくだりもある。
「私は憲法改正に便乗して、外のいろいろの事が出ると思って否定的に考えていたが、今となっては他の改正は一切ふれずに軍備の点だけ公明正大に堂々と改正してやつた方がいい様に思う」
「軍備といっても国として独立する以上必要である。軍閥がわるいのだ。それをアメリカは何で

も軍人は全部軍閥だという様な考えでああいう憲法を作らせるようにするし」と言っている。

また、沖縄については、有名な天皇メッセージもさることながら、この「拝謁記」で、「基地の問題でもそれぞれの立場上より論ずれば一応もっともと思う理由もあろうが、全体の為に之がいいと分れば一部の犠牲はやむを得ぬと考える事、その代りは一部の犠牲となる人には全体から補償するという事にしなければ国として存立して行く以上やりようない話」だ。

これらを読めば、象徴天皇として生き延びた天皇（天皇制）が、戦前のように元首として国政に影響を与えようとしていたのかがわかる。形ばかり「反省」を入れることがクローズアップされているが、再軍備を進め、沖縄を再び捨て石にすることをまるで元首のように政治に関与する姿勢が見て取れる。そして、これらのことは、アジア諸国への戦争や植民地支配の反省や責任など微塵も認識せず、すべては「万世一系の国体護持」が究極の目的のためであったと私は思う。

そしてこれが、纐纈さんの言われる、戦前と戦後の連続性なのだと思う。天皇の戦争責任を「日本人」自ら問えなかったことが、アジアに対する戦争責任や植民地支配を清算せず、今の歴史修正主義が跋扈する状況を作ったと言っても過言ではないと。

今、あいちトリエンナーレの「表現の不自由展・その後」の中止をめぐって、大きく問題にされているのがいわゆる日本軍慰安婦の問題を扱った「平和の少女像」だ。しかし、この展示には、1986年に富山県立近代美術館主催の「86富山の美術」で展示された大浦信行さんの作品「遠近を抱えて」や「焼かれるべき絵」など天皇をモチーフにした作品が展示されている。そして、「表現の不自由展・その後」への抗議の5割が「平和の少女像」、4割がこれら天皇をモチーフにする作品だという。河村名古屋市長は、名古屋市のHPでこれらの作品を『象徴的存在である昭和天皇の「肖像写真」が意図的に燃やされているように見える状況を描いた作品は、その主題自体が甚だ礼を失する遺憾なもの・・日本国民・社会公衆の多くに著しい侮蔑感・嫌悪感を与える・・』と記している。

「表現の不自由展・その後」の中止の問題は、第一義的には「表現の自由」が侵害された、ということであるが、その根底には、日本の侵略戦争や植民地支配の問題をいまだ解決できないでいること、天皇の戦争責任、戦後責任の問題、天皇制がはらむ問題に向き合えない日本の社会や運動の状況を問い直すことから始めなければならないだろう。纐纈さんの講演は、改めてそのことを認識させるものであった。

あいち平和のための戦争展2019

8月15日から18日まで、あいち平和のための戦争展が、市民ギャラリー矢田で行われ、1840名の参加がありました。今年も、不戦ネットは「自衛隊9条壊憲の現実」というテーマで展示を行いました。一昨年出された、防衛計画の大綱と中期防衛力の整備計画のもとで進む自衛隊の装備面での実態や、南西諸島への自衛隊に配備強化の現実、取りざたされている中東への自衛隊の派遣を意識し、中東の情勢などを展示で訴えました。また、毎年、協力関係を保っている、あいち沖縄会議と命どぅ宝の会は辺野古・高江の現実や沖縄の歴史を振り返るえる展示を行いました。条文改憲の前に、進む壊憲の現実は伝わったと思います。